
侍道 4 もしも鬼怒川千佳が主人公だったら

KINOKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍道4 もしも鬼怒川千佳が主人公だったら

【Nコード】

N8497Y

【作者名】

KINOKO

【あらすじ】

侍道4の鬼怒川千佳きぬがわちかが好きで書いてみました。これはもしも千佳が主人公だったらというお話です。ルートとしては主に『外国人ルート』と『希望の光ルート』をメインに書いていきたいと思っています。

千佳 外の世界へ（前書き）

主人公は鬼怒川千佳。様々な勢力と関わり、千佳は何を思うか…。

千佳 外の世界へ

幕末の時代。阿見浜の代官所に拷問好きの3姉妹がおりましたとさ。

「お仕置きの時間だよ！」

髪を束ねた美しき姫『鬼怒川千佳』が牢の扉を開け、罪人に歩み寄り、罪人を連れ、両腕を後ろ手に縛りつけ、足場のような床に正座させ、人間豚達が罪人に向かって重石を投げつける。

「やめて〜!?!」

罪人が喚き叫ぶのを見て、千佳は高笑いするだけであった。

代官所内。千佳は拷問を終え、愛用の戦闘服から黒い小綺麗な着物に着替え、自室に戻った。

「お姉様。お疲れ様ですの。」

千佳を労ったのは短い髪で同じ着物を着ている千佳の妹の『鬼怒川百合』である。

千佳「チッ…。最近の治安が悪いせいでヤクザ者や金を踏み倒す輩とか出てきて面倒だよ！」

千佳も百合もそして、

「その割には楽しんでませんか？千佳。」

千佳と百合の姉『鬼怒川万由』も拷問が趣味であるが、最近は何見
浜の治安が悪いので千佳がほとんど拷問している。

千佳「毎日毎日…。同じ事ばかりで退屈だよ…。」

千佳は文句を言いながら、立ち上がり、自室を出る。

百合「あっ！お姉様。どこにいくんですの？」

千佳「ちょっと出掛けてくる。」

万由「あら珍しい。千佳。暗くならないうちに…。」

千佳「わかってるよ！あたいは百合より大人だ。」

千佳は代官所を出る。

百合「お姉様！私だって大人ですよ！」

代官所から離れ、千佳は刀を一本だけ持ち、大通りを歩いていた。
二刀流の使い手である千佳だが、ここでは『鬼怒川千佳』を隠し、
女でありたいのである。一本だけの刀は護身用であり、一刀流でも
戦えないわけではない。

千佳「領事館？」

千佳の眼に少し離れているが目立った建物『領事館』が映った。

千佳「公使様にお茶でも入れてもらおうか…。」

あの阿見浜の戦。3姉妹と『茂呂茂』とで外国人公使『ローラ・リター』とその護衛の伯爵『J・J』とで日本の事で話し合いをしていた。千佳にとってはくだらない話だったが、紅茶とやらが美味しかったのを覚えていた。男勝りな性格の千佳もまた女なのであった。

千佳「もう一度飲んでおきたいね〜♪」

千佳は思い出し笑いをしながら、領事館へと向かった。

領事館へ挨拶&ローラの実験（前書き）

セリフとかはゲームの時と異なるとは思いますが、ゲームらしく選択肢も書いてみましたが、戦闘の書き方がシヨボーイと思いますが、読んでいただければ幸いです。

領事館へ挨拶&ローラの実験

1日目。昼。千佳は領事館を目指し、居留地という外国人とホームレスの多い通りを歩いていた。カランカラン。

千佳「？」

千佳の足元に空き瓶が転がった。

千佳「何だい？これは。」

「すみません…。姫様…。」

千佳に謝ってきたのはホームレスだった。

千佳「姫様はおよし！気をつけな。」

千佳は空き瓶を手渡し、領事館へと歩き直した。

ホームレス「助かった…。」

ホームレスが千佳を恐れていたのは千佳による拷問が待っていたかもしれないからだ。しかし、千佳は見逃したため、ホームレスは安心感と疑問をもっていた。

メリンダ「姫君様か？公使様に何用か？」

領事館を見張っていたのはローラに仕えるパツキン隊を束ねている金色の鎧の女性『メリンダ・デカメロン』であった。

千佳「堅いねえ…。ちょっと公使様とお茶したくなったのさ。」

メリンダ「では、ついてくるがいい。」

メリンダは千佳を領事館に案内し、中へと入った。

領事館内。ローラの部屋に案内される千佳。

千佳「へえ。あたいらのことは偉い違いだね。」

千佳は洋風の部屋を初めて見る。

ローラ「ようこそお越しくできました。」

千佳を出迎えてくれたのはローラ。

J・J「いやあ。相変わらず美しい姫君様だ♪」

J・Jも千佳を出迎えてくれたが、

千佳「チツ…。ケダモノが…。」

ローラ「すいません…。伯爵に悪気はないんです…。」

千佳「まあいいよ…。お茶煎れてくれない？紅茶とやら、美味しかったからね。」

ローラ「お茶をお持ちしてください。」

ローラはメリンダにお茶を命じ、千佳は近くの椅子に座る。

ローラ「遠い所からわざわざ…。」

千佳「挨拶はいいんだよ。」

ローラ「あのお話…。考えて頂けましたでしょうか？」

あのお話とは、日本に米国の技術や知識を取り入れ、世界有数の絹の工場を建てるという話だ。

千佳「あたい1人じゃ決められないよ。お父様に聞いてみないとねえ。それに今すぐじゃ攘夷志士の連中が騒ぎ立てるよ。アハハハハ。」

千佳の高笑いにローラは苦笑い。千佳とローラのところに紅茶が運ばれ、千佳は紅茶を口にした。

千佳「美味しい♪少なくとも紅茶だけは日本に置いてもらいたいもんだねえ♪」

千佳は紅茶の味に女性らしさを魅せていた。

ローラ「姫君様。この後お時間よろしいでしょうか？」

千佳「いいよ！いいよ！あたいは退屈してたところだったからね。」

ローラ「夕方に最新技術を使って開発した機械の実験をしたいと思うのですが、見ていきませんか？」

千佳「実験？」

ローラ「はい！」

千佳（面白そうだねえ or つまらない帰る！）

千佳「面白そうだねえ。どんな物か見させてもらおうよ。」

ローラ「ありがとうございます。」

夕方。千佳とローラは領事館を出て、近くの機械に近づいた。

千佳「何だい？これは。」

ローラ「これは遠くにいる人に言葉を送る道具ですよ。」

千佳「へえ。」

千佳が感心していた時、

茂呂「いよいよ始まるんですね。」

千佳「茂呂！？」

茂呂「これはこれは姫君様。珍しいですね。外出とは。」

千佳「なんだっていいだろ？そうだったね…茂呂は積極的だったな。」

さすがのお嬢様の千佳も茂呂の行動は見ていた。

ローラ「それでは実験を開始しますので。」

茂呂「はい。姫君様。こちらへ。」

港。千佳は茂呂に連れられ、もう一台の機械に近づいた。

千佳「どうなるんだい？」

茂呂「これで言葉が紙になって出てくる仕組みですよ。」

千佳「なるほどね。」

そして、機械から紙が出てきた。

千佳「英語？ここは日本だよ…。日本語にしな。」

茂呂「まあ…そうおっしゃらずに…。この茂呂茂に読めないものはない。」

千佳「さっさと教えな。」

紙には『h e l p m e』…。

茂呂「助けて。」

千佳「助けて？何言ってるんだい？」

茂呂「ローラさんが危ない!？」

茂呂は走る。

千佳「ちょっと!?!? 待ちな!」

千佳も走った。

領事館前。赤い服の男達がローラを囲む。

ローラ「助けて!?!」

茂呂「ローラさん!?!」

千佳と茂呂が駆けつける。

千佳「攘夷じゃないか。」

攘夷「なんだ貴様ら?」

千佳「いい退屈凌ぎになりそうだよ♪」

千佳は刀を抜き、茂呂も素手の構えをした。

茂呂「これでも鍛えてるんだぜ。」

茂呂は夕張流体術で攘夷をなぎ倒し、

千佳「終わりだよ！」

千佳も刀を器用に振り、攘夷をなぎ倒し、攘夷は全滅した。

千佳「大したことない奴らだね。」

千佳は刀を収める。

茂呂「何がともあれ、実験は成功ですな。おかげでローラさんの命が助かったんだから。」

ローラ「はい。それと…姫君様のおかげです。」

ローラにお礼を言われ、千佳は顔を赤くし、

千佳「英語じゃなくて日本語に…。茂呂が読んでくれたから助かったんだからな…。」

千佳はツンデレになり、恥ずかしながら、その場を去ってしまったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8497y/>

侍道4 もしも鬼怒川千佳が主人公だったら

2011年11月25日14時45分発行